
儒家の武

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儒家の武

【Nコード】

N3241R

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

孔子を暗殺しようとする者が彼に刺客を送り込んだ。それに対して孔子がしたこととは。孔子は身長二メートルを超える筋骨隆々の大男だったとのこと。

第一章

儒家の武

孔子がいた。彼は祖国魯では政治家でもあった。

政治家としての才覚も確かなもので豊かな学識や厳格で几帳面な性格もありだ。魯の国を見事に治めてもみせたのである。

人を見る目も確かで適材適所に人を置いた。しかしであった。

政治家という仕事は敵が多くなるものだ。所謂政敵である。有能であればあるだけ出世を妬む者が出るし改革を進めれば既得権益を脅かされる者達が憎む。現状維持であれば改革を望む者達が不平を抱く。とかく何をしても敵を作ってしまう仕事だ。

これはこの時代も同じである。そしてだった。

孔子もまた多くの敵を抱えていた。魯の至るところにである。

その中の一人がだ。密室で部下達とこう話していた。

「このままではな」

「そうですね。孔丘めにです」

「地位を脅かされますな」

「そうなりますな」

こう話す彼等だった。孔丘とか孔子の本名である。

「ではここは」

「公に言つてそれで」

「奴を動けなくしますか」

「そうされますか」

「できるものか」

中心にいる者がそれを否定したのだった。

「讒言してもだ」

「はい」

「効果がありますが」

「孔丘が公に話して弁明して終わりぞ」

「そうでしたな。あの男弁も立ちます」

「見事なものです」

伊達に学者ではなかった。彼は弁も立つ。それも見事なまでにだ。

「それによって公への讒言もですか」

「打ち消されてしまう」

「そうなってしまつと」

「そうだ、だからそれは意味がない」

「そうだとこのうのだった。」

「おまけに奴の仕事を改竄してもだ」

「あの男、確かめるのも念入りですし」

「しかも多くの弟子達が常にその仕事を手伝っています」

「それでは工作をしても」

「それもなのですね」

「すぐに防がれる。それも無理だ」

「これもだというのだった。」

「だからだ。ここはだ」

「はい、それでも孔丘は何とかしなければなりません」

「さもないと我等は本当にです」

「何もかも失います」

「どうにかしないと」

「既に考えてある」

中心の男が言った。暗い密室の中に車座になって座っているがだ。

彼のその姿や言葉がまさに場の中心となっているのである。

「それはだ」

「といたしますと一体」

「何をされますか」

「まさか」

「そのまさかだ」

「こつ言う男だった。」

「刺客だ。それを送る」

「殺してですか」

「あの男ごと消してそれで」

「全てを終わらせる」

「そうされるのですね」

「そうだ、そうする」

こう話してだった。彼は決めたのだった。

「あの男は所詮儒者だ」

「武芸はできません」

「確かに弁は立ちいざという時のはったりもある」

「それでも。儒者でしかありません」

「では」

こうしてだった。孔子に対して刺客が送られることになった。そうしてだった。

まずは彼の食事にだ。こっそりと酒に毒を入れた。誰にも気付かれないように酒を入れた壺に含ませたのである。これで始末するつもりだ。

第二章

しかしその酒はだ。孔子が捨てさせたのだった。

「この酒はよくないな」

「よくありませんか」

「そうだ、古くなっている」

こう弟子の一人に言うのだった。

「だからだ。すぐに捨てなさい」

「いささか勿体無い気もしますが」

「しかし古くなり腐ってしまったものを飲んでも仕方あるまい」

これが孔子の言葉だった。

「違うか、それは」

「そうですね。言われてみれば」

「だからだ。捨てなさい」

「わかりました」

こうして毒を入れた酒は防がれてしまった。失敗であった。

だがこれが防がれてもだ。刺客も諦める訳にはいかなかった。それで今度はだ。

孔子が街を歩いている時にだ。物陰から石弓を放つことにした。

これで孔子の頭を撃ち始末することにしたのだ。

孔子は馬車で街を進んでいた。周りにはやはり多くの弟子達がいる。そうした物々しい様子で魯公の宮殿に向かっていたのである。

そこでだ。物陰から孔子を狙い。石を放ったのだった。

「弓矢なら怪しまれるが石ならな」

その危険は少ない、暗殺だとわからないとの考えだった。

それで撃った。しかしだった。

孔子は首を左に捻った。それだけであった。だがそれだけでだ。

石は彼の顔の横を飛びそしてそのまま飛んでいった。それで終わりだった。

「おや、先生」

「何かありましたか？」

「一体」

「どうされましたか？」

「いや、何でもない」

素っ気無く返す孔子だった。

「気にしないでくれ」

「左様ですか」

「それでは」

弟子達も彼の言葉に頷く。そうしてだった。

白髪の若い者がだ。師に言ってきた。

「では先生、今日はですが」

「うむ、魯公と共に楽を聴くのだがな」

「はい、それではですね」

「それで顔回よ」

孔子はその白髪の者の名前を言ってきた。

「そなたは相変わらずか」

「いけませんか」

「それはいいのだがな」

孔子は難しい顔で彼にまた言った。

「質素な暮らしでもいいのだがな」

「はい、私は学べればそれでいいです」

「わかった。ではな」

「それでは」

こんな話もした。そうしてなのだった。一行は魯公の宮殿に進むのだった。孔子暗殺はこの時も失敗に終わったのだった。

このことだ。刺客もいい加減苛立ちを覚えてきた。

「運のいい奴だ」

こう考えたのだった。

「こうなつてはだ。最後の手段だな」

そしてなのだった。孔子の屋敷に忍び込んだであった。

そして夜にだ。天井を伝い彼の部屋に潜り込み上から右手に持った刃で襲い掛かった。

「死ね！」

天井から飛び降りそして突き刺さんとする。だがここで。

寝ていた孔子はふと目を覚まし。その脚を前に突き出したのだった。

その脚が刺客の腹を打った。急降下する彼の腹に突き刺さった。

「ぐっ……」

「何奴！」

「何の！」

目を開いた孔子の問いに答えず慌てて右に跳びだ。壁を蹴ってそこから宙返りして床に立った。そこからまた孔子に襲い掛かる。

第三章

しかしここでもだった。孔子は起き上がりそのうえでだ。右手から突きを繰り出した。

それで顔を打ったのだった。そこから左手の手刀を横から出して刺客の首を打った。刺客はこれで完全に吹き飛ばされてしまった。

こうして孔子は危機を脱した。見事なものだった。

この話は暫く経って魯に広まった。皆口々に言うのだった。

「あの人そんなに強かったのか」

「刀を持った刺客を素手でか」

「しかも寝起きでそれをやったってな」

「凄いよな」

「相当強いんだな」

「しかしな」

褒め言葉の後でだ。言われるのだった。

「何であの人そんなに強いんだ？」

「ああ、そういえばそうだよな」

「ちよつと洒落にならない強さだけれどな」

「武芸をやってるみたいな感じだけれどな」

その強さからだ。こう考えられたのだった。

「あの人儒者だろ？」

「何で儒者がそこまで強いんだ？」

「だよな」

「学問ばかりしているのにな」

「どうしてなんだ？」

「おいおい、知らないのか」

だがここでだ。孔子を知る者がいぶかしむ彼等に話すのだった。

「あの人な、武人の家の人だよ」

「えっ、そうなのか？」

「そうだったのか？」
「武人の家の出だったのか」
「そうだよ。お父上はこの国の將軍だったんだよ」
「実はそうだったのだ。孔子の家は元々その家の出だったのだ。それでだ。さらに話されるのだった。」
「その人はもう相当大柄で筋骨隆々でな」
「力も強かったのか」
「それでか」
「そうだよ。それであの人だってな」
「孔子の話に戻った。彼の父の話からだ。」
「お若い頃から武芸をしておられてな。弓なんかかなり得意なんだぞ」
「儒者なのにか」
「武芸をしておられるのか」
「そうだったのか」
「そうだよ、あの人強いんだよ」
「こつ話されていく。」
「文をしておられるが武の方もかなりなんだよ」
「そういえばな」
「そうだよな」
「あの人ってな」
「背がな」
「孔子の背についてだ。語られだした。」
「無茶苦茶大きいよな」
「殆ど巨人だよな」
「ああ、とにかく大きいよな」
「それに御身体も」
「今度はその身体もだというのだった。」

第四章

「遅しいよな」

「ああ、贅肉とかないよな」

「じゃあやつぱり」

「あの人もかなりか」

「そうだよ、強いんだよ」

ここでまた話されたのだった。

「尋常じゃない位にな」

「うっん、そんな人だったんだな」

「いや、聞いてびっくりしたよ」

「本当にな」

「文だけじゃなくて武もだったんだな」

「そうだったんだな」

皆驚く他なかった。孔子のそうした一面を知ってだ。

そしてなのだった。その孔子はだ。この日弟子達と共に弓を引

ていた。

弟子達に囲まれていながらもすぐにわかった。顔が完全に出ていたのだ。その大柄さがこれ以上はないまですべてに出ていた。

その彼がだ。弟子達に話すのだった。

「さて、弓だが」

「はい」

「思いきり引かれるのですね」

「そうだ、まず思いきり引く」

孔子はここで実際に弓を思いきり引いてみせた。かなり大きな弓だがそれでもだ。彼は一気に引いてみせたのである。

そしてそのうえで矢をつがえて放つ。弓は的の中心に突き刺さった。

そうしてみせてからだ。彼はまた弟子達に話した。

「こうするのだ」
「弓も計りもしっかりとする」
「そうしてからですね」
「何ごとも基をしっかりとするのだ」
「これが孔子の言葉だった。」
「わかったな」
「はい、わかりました」
「しかし先生は」
「そうだよな、相変わらず」
「お見事だよな」
「弟子達はここで話を変えてきた。」
「そんな重い弓を一気に引かれるとはな」
「物凄いお力だよ」
「全く」
「ははは、幼い頃から鍛えていたからな」
「孔子はその長く白い髭を動かして笑って述べた。」
「これはな」
「だからですか」
「そしてその御身体もあり」
「そこまでのお力があるのですね」
「武芸はいいものだ」
「また言う孔子だった。」
「こうして身体を鍛えれば心まで澄み切る。だからだ」
「はい、こうしてですね」
「学ぶだけでなく」
「そういうことじゃ。武芸にも励まなくてはいかん」
「言いながらまたその大きな弓を引いて矢を放つ。その矢も的の中心に突き刺さる。孔子は弟子達と共に武芸も楽しむのであった。」

儒者の武

完

2
0
1
0
・
1
1
・
2
6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3241r/>

儒家の武

2011年3月2日23時10分発行